

〈提 題〉

ヒルデガルトの視る「原罪」

佐藤 直子

はじめに

小論はビンゲンのヒルデガルト (Hildegard von Bingen 1098–1179 年) の処女作である幻視書 *Scivias* (= *Sc.* 1141–51 年) から、彼女が原罪をいかに視ていたのかを探ることを目的とする。小論で扱う箇所は *Sc.*, *Protestificatio*(= *Pro.*), *Sc.*, *pars I, visio 1*, *Sc.*, *pars I, visio 2* および *Sc.*, *pars II, visio 1* である (いずれも当該幻視についての「高みからの声」の解説を記した *auditio* 部を含む)¹⁾。ヒルデガルトは晩年 *Sc.* の幻視を改めて細密画として描かせており (*Rupertsberger-Riesenkodex*²⁾)、ここでは該当する細密画も指摘する。なおヒルデガルトにあつては原罪と墮罪の概念的区別はなく、原罪に関わる幻視とそれを説明する「高みからの声」は、ルチフェルの墜落・人祖の墮罪・双方に共通する神への態度・墮罪の結果としての諸状況を救済史観のもとに位置付けている。

ところでヒルデガルトには、二層の預言者としての自覚がある。一は「(心の) 貧しい者」であり (*Sc.*, *Pro.* [Tafel 1] ; *Sc.*, *I, visio 1; 2* [Tafel 2; 3] ; マタ 5:3 参照), ここに性別は関わらない。「(心の) 貧しい者」という自覚

1) *Sc.* の各部内でテキストは幻視毎に分かれる。各幻視を記すテキストは幻視自体をテキスト化した *visio* 部, *visio* 部を解説する「高みからの声」を記す *auditio* 部から成る。拙論では引用箇所を底本に従って, 部, 幻視番号, *visio* 部ないし説番号, 行数で示した。なお関連する聖書箇所は、『聖書協会共同訳聖書』(2018 年) の略号を用いて記している。

2) 同写本のオリジナルは 1945 年のドレスデン大空襲で消失したが, 1927–33 年に作成された忠実な模写が現存する。複写は Eibingen にある St. Hildegard Abtei のホームページに以下のアドレスに解説付で掲載されているので参照されたい。https://www.abtei-st-hildegard.de/die-scivias-miniaturen/ 小論では関連する細密画の Tafel 番号を記載した。

は、蒲柳の質の彼女には幼少期からあった³⁾。他は「エヴァの違背ゆえに男性に踏みつけられる者」つまり「女性」である (*Sc.*, pars II, visio 1, esp. l. 89-106 [Tafel 10])。一人の預言者の自覚に二層があることは奇異なことではない。預言者は神と直接に関わりの中に居りながら、「或る共同体に帰属する者」として召命を受けるからである。*Sc.* においては、神との直接の関係を鑑みれば彼女の自覚は「(心の) 貧しい者」であり、そこから発せられる預言は「神と人間」の普遍的関係および人祖の墮罪と救済史を俯瞰した内容となる。だが、具体的な共同体に帰属し、預言自体が当該の共同体への批判・警句を含む際には、「預言者」は当初より共同体から疎外された者、もしくは預言を為すことで当の共同体から疎外される者となる。*Sc.* にあって疎外された者としての彼女の自覚は「女性」であることだった。女性であることによって共同体から疎外された者が、「預言」という形式で共同体批判を行うという構造も *Sc.* には存在する⁴⁾。以下ヒルデガルトが「女性預言者」として視た原罪に関わる幻視と「(心の) 貧しい者」として視たそれを概略した上で、ヒルデガルトにおける「原罪」の意味について考察する。

1 ヒルデガルトの視る原罪の諸相

1) 「女性預言者」として視る原罪

まず特定の共同体・当時の教会共同体への批判となる「女性預言者」として視る原罪を概観しよう。一見きわめて特異に見えるヒルデガルトの幻視に基づく預言は、その実ほとんど聖書と教父思想の伝統に裏打ちされている。だが「女性預言者」の自覚のもとで視る *Sc.*, pars II, visio 1 のみは例外であり、批判校訂版の欄外註には、聖書を含めて、出典・参照註の記載が一切ない。

火炎が土塊を人間にする。この人間に同じ火炎が一輪の純白の花を差し出す。人間はその花の香を嗅ぐが、味わわず、手でも触れない。そのために人間は道を外れ、自力で這い上がることの叶わぬ深い闇へと落ちていく (*Sc.*, pars II, visio I, l. 35-60; Tafel 10 上部)。

この幻視について「高みからの声」は次のように説明する。純白の花は御父の御言葉である。人間はこれを「知恵という知性の働き」で引き寄

3) *Vita Sanctae Hildegardis Auctoribus Godefrido et Theodorico Monachis* I, 2, L. 13-17 (井村監訳, 132-133 頁)。

4) ゴスマン, 2016, 103-104 頁。

せるが、味わって自らの内奥へと入れず、御言葉を手にして何かを成し遂げることをしなかった。それゆえ人間は闇の中へと転落した (*Sc.*, pars II, I, 8, l. 234-253)。ヒルデガルトにとって「知る」ことは「味わう」ことであり、知は神意に従い旨を成し遂げるためのものであった (*Sc.*, Pro., l. 5-35)。そうでなければ知は徒に人間を高慢へと導くものでしかない。ここで「高みからの声」は、教義や聖書解釈に通じながらも、これを神の意図に従って用いない聖職者である男性の怠惰を告発し、女性預言者にこれを言わしめるのである。

2) 「心の貧しい者」として視る原罪ルチフェルの墜落・人祖の墜罪

Sc., pars I の実質的な端緒となる幻視 visio 2 とその解説である「高みからの声」は、「天使の創造」の後に、当時すでに伝承とはなっていたものの創世記には記載のない「ルチフェルとその朋輩の墜落」が語られ、その後人祖の墜罪とその帰結が記される。対応する細密画は Tafel 3 である。

① 神に従う天使たち (cf. Tafel 3 上部) 「高みからの声」の幻視説明は、細密画上部の星々から為される。星々は天使たち、その輝きは神から来る。ルチフェルは高慢 (*superbia*) から神と同じ者となろうとし、その朋輩もろともに墜落した (*Sc.*, pars I, 2, l. 100-114)。この事件をよそに、正しさ (*rectitudo*) の内に踏み留まる天使たちは、神の栄光から離れることなく、神の輝きを受けて輝き続ける。さらに天使たちの内には、神への賞賛——ルチフェルの不義にも関らず神の権能は変わらない——が生じる (cf. *ibid.*, l. 101-126)。

② 「高慢」とその報い ルチフェルらの高慢に対して「主の熱情」 (*zelus Domini*) の下した罰は、彼らが「神を知ることを望まなくなる無知の怠惰」 (cf. *Benedictus, Regula* 7) に取り付かれることだった (*ibid.*, l. 85-89)。「高みからの声」は「悪魔の罪の仲間を模倣する人間たちも、その過失に応じて報いを承ける」と警告する (*ibid.*, l. 171-173)。「神を知ることを望まなくなる無知の怠惰」それ自体が、すでに呪われた状態なのである。

③ 地獄から立ち上る煙がアダムとエヴァを惑わす 地獄 (Tafel 3 右下) からは悪臭芬々たる火煙が立ち上り、その先端が蛇となって人間 (アダム) の脇から出ている星々 (全人類) を孕んだ雲 (エヴァ) を誘惑する。誘惑に負けた彼らは子孫ともどもに樂園から追われる (*Sc.*, pars I, 2, visio, l. 58-65; Tafel 3 中央, 右の明るい領域から左の地獄への転落)。地獄から立ち上る火煙はルチフェルの朋輩、悪霊や悪魔・蛇である。ヒルデガルトの他書に

よれば、彼らは日々どこでも人間を喰す⁵⁾。

④ 男女の関係性の変化 ではなぜ蛇はエヴァを最初に喰したのか。「高みからの声」は語る。悪魔はエヴァがアダムより繊細・脆いためにアダムよりエヴァに打ち勝ちやすいと知っていた。のみならず悪魔は、エヴァがアダムの愛のうちに輝いているのを見、他の被造物を通してよりもエヴァを通して騙す方が、容易にアダムを不服従に貶めると見て取った (*ibid.*, pars I, 2, 10, l. 236–247)。その後の *Sc.*, pars I における原罪の物語は、具体的な愛と結婚についての記述へと移行していく。もともとは男性の純粋な愛の対象であった女性が「エヴァの違背ゆえに男性に踏みつけられる者」へと移行していくという、男女の関係性の変容、あるいは共同体性の変容が、「女性預言者」としてのヒルデガルトにおいては明確に看取されているのである。

⑤ 神の子の受肉と受難の必要性 次いで「高みからの声」は、救いのために神の子の受肉と受難が必要であると説く。本性を違えるものは救いを齎さない。救いには、神の子が原罪から免れた仕方である人間となることが必要であった (*ibid.*, pars I, 2, 14, l. 389–397; ヘブ 2:9; 17–18; 4:15 参照)。

⑥ 諸元素の混乱 人祖の墮罪は宇宙規模での混乱を引き起こす。神に従う人間に奉仕すべく造られた他の被造物は、人間が神に背くと秩序を逸し混乱し、人間に抗い、大きな災厄も齎すようになったのである (*ibid.*, pars I, 2, 27, l. 660–672; cf. 創 3:17–18)。Tafel 3 の四隅には楽園での四元素が描かれるが(水・土は下部隅、火・風が上部隅)、秩序あるこの状態が失われる。人間もまた諸元素より構成されているので、心身の不調、生殖・出産時の苦痛、身体の死が出来る (*ibid.*, pars II, 1, 8, l. 255–258)。

「高みからの声」は森羅万象を活かす力を“*viriditas*”と呼ぶ。これは樹液が緑豊かな木々を活かすことに譬えた造語である (*ibid.*, pars I, 2, 28, 673–674)。「最高に燃え立つ“*viriditas*”」は、父と子から聖霊を發出させる神的生命原理である (*ibid.*, pars III, 7, 9, l. 393–396)。墮罪前の楽園は“*viriditas*”に満ち、花が咲き誇っていた (*ibid.*, pars I, 2, 28, l. 674–680; Tafel 3 下部)。宇宙における諸元素の秩序混乱と人間の病苦と死は、神的な“*viriditas*”からの疎外である。諸元素の秩序喪失とは、同じ事態の自然学

5) ヒルデガルトはその自然学・医学的著作 *Cause et Cure* (= *C. C.*, 1150–58 年)で、ルチフェルは、自らは冥府 (*tartaerus*) から動くことはできないが、悪魔や悪霊たちを地上に送り込み人々を誘惑する、と記している。彼らはどこにでも居り、お御堂の中すらも臆せず闊歩する。*C. C.*, pars II, {126}, etc.

的・医学的表現である⁶⁾。

2 ヒルデガルトにおける「原罪」の本質とその報い

上記の二つの幻視と各々への「高みからの声」の素描から、ヒルデガルトの視る原罪・墮罪の本質と、それが齎す結果を纏めよう。

1) 高慢と秩序転倒, 神からの疎外, 自己疎外, 非本来的他者関係の出来と諸元素の混乱

ルチフェルの墜落と人祖の墮罪の本質は、共に高慢にある。高慢とは、神の下にあるべき意志を有する被造物が、自らの意志で、神への畏敬の念を捨て、神に並び立とうとする秩序転倒である。秩序転倒はそれ自体で「神を知ることを望まなくなる無知の怠惰」という神からの疎外となっている。神疎外の出来が「地獄の生成」であり、「地獄」とは神からの疎外そのものである。

被造物は神からの関係で存在し、当の被造物として光を放つ。知性的な被造物であれば、この関係自体を味わうほどに自覚し、自らの意志において遂行する従順が、本来的な在り方となる。その軽視が神からの疎外を生じさせ、人祖は「自力で這い上がることはできない暗闇に落ちていった」(Sc., pars II, 1, visio, l. 58-60)。被造物が神からの関係を得て存在することからして、神からの疎外は人間の死へと至る心身不調をも引き起こす自己疎外であり、自罪および共同体の在り方の変容——本来的位階秩序から抑圧・被抑圧関係への移行——の原型でもあれば基底でもあり、神的な“viriditas”から宇宙全体の阻害を来すものである。

2) 神の子の受肉・受難と救い (Tafel 10 下部)

だがヒルデガルトの視る原罪は、疎外状況に終着点があるわけではない。「自力では這い上がることができない暗闇」に落ちた人間の救いのために、神の子が人間となる (Sc., pars II, 1, 13, l. 310-328)。御子の受肉は Sc. 全体

6) C. C. では四元素は宇宙の「支柱」(firmamentum) とされる (C. C., pars I, 6 {7} etc.)。被造物は四元素の集散で生滅変化する。四元素の秩序の乱れは全宇宙に影響を及ぼし、異常気象や災害を齎す (C. C., pars II, 42 {97})。小宇宙である人間の心身でも元素の混乱により体液異常が生じ、危険を伴う生殖、心身の不調、障害、疾病を来す (*ibid.*)。この四元素の乱す因子がアダムの精子を通して子孫に伝わり〔原罪の生殖による伝播〕、病因となる (C. C., pars II, 9 {64})。さらに個々の人間は、自らの行為によって四元素の配置を乱す (C. C., pars I, 33 {39}; pars II, 26 {81}; 42 {97})。

の中で新たな救済史の始点として位置づけられ、新たな救済史は教会を中心に織りなされる。それはキリストの受肉・受難・復活と教会の秘跡を経て救済史の終点「完成」に至る。この完成においては、楽園における原初状態を凌ぐ善き状況が人間に齎られるのである (Sc., pars I, 2, 31, l. 707-718)。

3 試みの意味

Sc. の記述は高慢が原罪・墮罪の本質であることを指す。しかし、1) 高慢への誘惑がなぜ人間に与えられているのか、2) 完成が原初状態に優るとはいかなる意味であるか、について、改めて考察すべきであろう。

1) についてはテキストに頻出する「自由な意志」に関わる。被造的な意志は神への従順とともに神からの違背へと開かれている。そのため「意志すべきでないものを意識しない」ことは意志に課題として負わされている。この課題を個々人の意識に明確に突き付けるものが「試み」である。さらに「高みからの声」は「試み」が研磨であると告げている。「汝らは神の像と類似像に向けて造られたのではなかったか。汝らに神が与えたこれほど大きな栄光とこれほど多くの名誉が……試みなしにあり得るであろうか (Iベト 1:7 参照)。金は火のなかで試されなければならず (知恵 3:6 参照)、すべてのものはすべてのものにおいて入念に試されなければならない。……神の像と類似像に向けて造られたこのものが試みなしに在りうるであろうか (ヤコ 1:12 参照)」 (Sc., pars I, 2, 29, l. 681-692)。「試み」において人間は、従順にあるべき秩序のうちに留まるか、教唆や恣意に従うかについて選択に迫られつつ、磨かれていくのである。

2) については、Sc., pars I, 2, 1 の、ルチフェルとその朋輩の墜落の後に「神に従う天使たち」に生じた称賛 (l. 100-114) の記述が暗示している。彼らの中には、ルチフェルの墜落劇を挟み、御稜威と自らの被造性についてより深い認識が生じることで、神への賞賛に至っているのである。人間においても「試み」により研磨されることで、より深い自覚——従順に秩序を保つべき者としての自分——と、より深い神認識——秩序において万物を統べ、秩序を乱した人間の罪さえも御子の血で贖う方としての神——を得るのである。こうした自覚・自己認識と神認識の深化を伴って、「試み」から (原) 罪・回心・赦し・救済・完成への道行きが人間に与えられ、最終的には「今、人間は、初めに天においてそうであったより、輝いている」 (Sc., pars I, 2, 31, title) とする状況が出来るのである。

結語——原罪の幻視のメッセージ性

こうした世界観・救済史観を「(心の) 貧しい者」として展開しつつヒルデガルトは、同時に教会共同体に警句を伝える「女性預言者」であった。「女性預言者」として彼女は、共同体から疎外された者として権力者批判を行う。しかしその批判は、自らが阻害されながらも帰属している共同体を秩序回復・救済・完成へと導くことを目的とし、それを通して救済史そのものに寄与すべくなされていた。同時に彼女は医学書を著わし施術者としても活躍している。癒しは医学的・自然学的表現では患者の四元素の秩序回復を目指すものだが、霊的表現をするなら患者の“viriditas”の回復——神的生命の“viriditas”に患者の“viriditas”を与らせること——を目指すものである。その意味で癒しの業は、原罪・墮罪により傷つき、悪魔や悪霊の教唆に晒され続ける人間に対して、救いと完成の雛形を形成し、差し出すものであった。「(心の) 貧しい者」として直接に神との関わりから預言するヒルデガルトの意識、疎外された者「女性預言者」として共同体の権力者を糾す意識、女子修道院院長として日々の具体的課題に向き合いつつ医師として患者を癒す彼女の意識は、原罪・墮罪により傷つけられた諸秩序の回復に立ち会い、完成へと導く神の協働者であり続けるという点では、いかなる矛盾もなく一人格の意識であった。

共同体から疎外された「女預言者」としてのヒルデガルトの預言は、人間が本性的に共同体を築くものであれば、本性の毀損または破壊状況から出来る共同体の本来の秩序の変容——その出発点は愛の一体性のうちにあるべき男女関係の変容にあった——への警句として、普遍的な響きを持っている。支配-被支配関係が出来ているのであれば、それは本来の共同体の在り方ではなく、何らか見つめ直すべき点を含むのである。さらに「(心の) 貧しい者」としての彼女が視て聴く原罪の本質・高慢に対する報いが「神を知ることを望まなくなる無知の怠惰」であったという点は、修道院神学また同時代のラテン中世の思想潮流という思想史的枠組みを超え、人間の宗教的次元を等閑にしたままで技術革新と経済合理性の地平拡大を推し進める「現代」に対する強烈な批判とも受け取れる。十二世紀の女性幻視者の原罪観は、二十一世紀を生きる我々にとっても大きなメッセージ性を有するのである。

一次文献

- Hildegardis Scivias*, ed. Adelgundis Führkötter OSB, Pars I-II (CCCM 43); Pars III (CCCM 43A), Turnholti, Brepols 1978.
- 『スキヴィアス (道を知れ)』(第二部) 拙訳, 上智大学中世思想研究所編訳監修 『中世思想原典集成 15 女性の神秘家』平凡社 2002 年, 31-306 頁。
- Vita Sanctae Hildegardis*, cura et studio Monicæ Klaes (CCCM 126), Turnholti, Brepols 1993, pp. 1-71.
- The Life of the Saintly Hildegard by Gottfried of Disibodenberg & Theodorich of Echternach*, translated, with an introductory essay and commentary, by Hugh Feiss, Toronto, Peregrina 1996.
- ゴットフリート修道士・テオーデリヒ修道士著 『聖女ヒルデガルトの生涯』井村宏次監訳・解説, 久保博嗣訳, 荒地出版社 1998 年。
- Beate Hildegardis Cause et cure (Rarissima mediaevalia Opera latina, vol. 1)*, ed. Laurence Moulinier, Berlin, Akademie Verlag 2003.
- Causes and cures: the complete English translation of Hildegardis Causae et Curae Libri VI*, intr. and tr. by Priscilla Throop, Charlotte, Vermont, MedievalMS 2006¹, 2008².
- 『聖ヒルデガルトの病因と治癒』白田夜半編訳, ポット出版 2014 年。
- La Règle de Saint Benoît. I-II (Sources Chrétiennes 181-182)*, ed. Jean Neufville, Paris, Éditions du Cerf 1972.
- 『聖ベネディクトの戒律』古田暁訳, すえもりブックス 2000 年。

二次文献

- Geschaut im Lebendigen Licht, die Miniaturen des Liber Scivias der Hildegard von Bingen*, erklärt und gedeutet von Sr. Hiltrud Gutjahr OSB und Sr. Maura Zátonyi OSB, mit einer kunsthistorischen Einführung von Lieselotte Saurma-Jeltssch, hrsg. von Benediktinerinnenabtei St. Hildegard, Eibingen, Beuroner Kunstverlag, 2011.
- Barbara Newman, *Sister of wisdom: St. Hildegard's theology of the feminine*, Berkeley, California U.P., 1987.
- バーバラ・ニューマン 『ヒルデガルト・フォン・ビンゲン——女性的なるものの神学』村本詔司訳, 新水社 1999 年。
- エリザベート・ゴスマン 「ビンゲンのヒルデガルトの自然理解」(茂牧人訳), 上智大学中世思想研究所企画編集 『中世の自然観』(『中世研究』第 7 号) 創文社 1991 年, 77-89 頁。
- 同 「中世ドイツの女性による神秘主義」(佐藤直子編訳), 同企画編集 『中世における知と制度』(『中世研究』第 14 号) 知泉書館 2016 年, 101-127 頁。